

の内容が貧弱であれ、そのこと自体が弱さの証明ではない。ただ太宰は、彼が一生一度の具体的な戦いの場に於て「甘さ」を表明した。それが太宰の致命的弱点となつたと言うことである。そして太宰の弱さはさらに拡大再生される。彼は「文学者ならば弱くなれ」と悲鳴のように叫ぶのだ。弱者の中に秘められた強き者への抵抗がいろんな型で存在し、わき出るからこそ弱さは美德にもなり得るのであつて、次の一節のような限りない弱さ、無抵抗の弱さは太宰の人間観にとつて致命的な意味を与える「太宰特有の弱さ」である。

自分にはもともと所有欲というものは薄く、自分の内縁の妻の犯されるのを黙つて見てゐた事さへあつたほどのです。

ミイラとりがミイラになつた。この姿はあまりに腐れ切つて次に何かを論じようという意欲さえ失わせる。

(長文のため、一章のみ抄出、又注は都合により省かせていただきました。編集部)

源氏物語に於ける

漢詩文引用と白氏文集

古 沢 未知男

源氏物語の研究には勿論種々各般の分野がある。が漢詩文引用の面からなされる事も亦私は確かに必要であると思つて居る。そして此の観点から従来さゝやかながら一聯の研究を進めて来た。

私に於てそれは結局 1、詞句出典や引用傾向の問題、2、引用の様式や技法、独創の問題、3、及びそれ等に繋がる源語の性格や構想の問題等を目標としたものであつた。

所で先年偶々同じ此等の問題に關聯して今井源衛氏の御意見があつた。(慶応義塾大学国文研究会編、国文学論叢第三輯、平安文学、研究と資料——源氏物語を中心に——「源氏物語における漢詩文の位置」)

思ふに氏の論説は着想と見識其の他多くの点に於て肯綮に当り示唆に富むものであり、啓示を受ける事甚だ大である。が一面また見を異にする所もないではない。茲に主として氏の論を中心に少しく卑見を述べて見たい。

さて先づ氏は玉上氏や私の源語所引漢詩文詞句数を挙げ

しかし実は右のような漢詩文の引用度数そのものはおよそ何物も語つてはいないのである。作者がそれらの本をよくよみ作品の中に数十度に亘つて取入れたというだけでは、影響の強弱とかその内容等についてはほとんど知ることができない云々。(全上)

と言つて居られる。

なる程確かに一応はその通りである。がしかし私から言へばそれは必ずしも十分ではない。楯の一面に止まり其の両面を得たものとは言へないやうである。何となれば引用漢籍や漢詩文の示す内的影響の強弱は必ずや其の頻度数の多寡となつて現はるべく、特に源語の場合此の感は一層強いと思ふからである。

けだし私は何も頻度数提示のみを以て事了れりとして居るのでは絶対ない。右の想定の下——それは結論的に誤つて居ないと思ふ。——論述の順序上先づ詞句頻度数を以てしたのである。具体的には

1、源語には頗る多数の漢籍・漢詩文詞句が引用されて居る。

2、其の中で白氏文集が圧倒的多数を占める絶対優位にある。

3、而もそれは多く原典白氏文集より直接の引用である。

といふ事を明らかにした。即ち此の事実が若し正しいとすれば、それはやはりどうしても源語と文集との密接な關係を予想させるものでなければならぬと思ふのである。

なる程今日例へば「螢雪」「株守」「衣錦還郷」等の語が文中に用ひられたとしても、それを直ちに晋書や韓非子や漢書に結びつける者はあるまい。況や其の文其の作者が其等の書や作品の影響を受けたなどは言はれない。が源語に於ける文集の引用は到底さういふ他人事では済まされなまいのがある。況やそれには勿論これを裏付けるべき裏面の操作をも併せ行つて居るに於てをやである。

更に氏は

この数字は一見漢詩文の圧力の強大さを想わせるけれども、実は和歌の引用例はこれの幾十倍に達するのであつて、その点から云えば伝統的な和歌の力の足許にも及ぶものではない。(全上)

と言はれる。確かにそれも間違ひない。それは氏も言はれる通り、作者が女子であり、又これが和文の物語である以上、寧ろ当然でもあらう。がしかしそれだからと言つて源語に対する文集の影響や關係が研究課題として取り上げるに足りないといふ事にはならない。否事実は、よし第二義的であらうと、そのまゝ看過するには余りに大きな要素を含んで居るのである。

氏は又続けて

一方のみに特に重点を置くべきものではなからう。たゞ其の場合主客本末の別があるだけである。即ち数的・外的にかくあるが故に質的・内的にもまたかくあるべしといふのでなく、質的・内的にもかくあるが、数的・外的にもまた同時にかくあるといふまでである。主体性の確認といふ大原則に於ては私も全く見を一にする。が引用詞句数の取り扱ひに関しては、基本的態度とはいはないまでも、何か少くも表現上の相違があるやうである。

二、

かくて私は前記作業の第4として当該文集受容の態度を検討し、或はそれを手掛りとして源語の性格を究めようとしたのである。今井氏の所謂「主体性」の問題である。

さて今井氏は

1、前記第1項、作者の好みについて、源語中に見られる「ざえ」や「学問」等の語の用法や内容・性質等から、これは式部が徒に学才を誇示する事を軽蔑したといふ彼女の「漢詩文に対して距離をつけた態度」に基くとされた。

なる程式部は自身非凡な学才を有しながら、術学徒にそれを誇示する事を嫌つた。学問をも含めて広く其の態度は源語中でも屢々表明されて居る。にも拘らず彼女の実際の生活記事「紫式部日記」にはまるでそれとは反対と言つても良い事例さへ往々にして見かけるのである。

これに対しては或は実際は実際、創作は創作と言はれるかも知れない。又若しこれが清少納言であつたなら、恐らく到る所更にもつと多くの漢詩文の引用がなされたであらう事も疑ひない。又今井氏の對比されたのは専ら源語中の女性の使用に関するものではあつた。がそれかと言つて源語に漢詩文の引用が少いとは思はれない。例へば近く其の枕草子と比較した場合、仮令文量の多寡、作品の性質等を考慮に入れても、源語が枕より少いといふ事は決してないであらう。紫式部日記にしても、源語と多少の相違はあるが、其の点やはり同様である。

2、次の第2項については、源語と史記との関係、つまり源語のあゝいふ構想あつて始めて史記が採用されたといふ事、及び特に文集諷諭詩引用による源語の性格に関する問題について述べられた事には私また全幅の賛意を表する。といふよりは寧ろ氏の見解もまた私のそれと完全に一致したといふのが適當である。但だ遺憾ながら私の既論稿に対する氏の解釈が不幸にしてそのやうにならなかつたといふだけである。

即ち源語と朗詠や枕との比較による両者相違の要点となつた諷諭詩について、氏は恰も私が「この諷諭詩」を「必ずしも諷諭の性格に於てのみ捉えず」「むしろ感傷の性格に重点を置いて考え」て居る如く解して居られるのがそれである。がしかしこれは明らかに事実相違す

けだし私は元来源語の文集引用が 1、新楽府・秦中吟の諷諭詩と長恨歌の感傷とを二大主軸として居る事、2、而も其の新楽府・秦中吟や長恨歌何れも其の裏多分に風情・情趣性を具へて居る事、及び3、源語では雑律・後続集中の本来閑適と思はれるもの——氏が「雑律や後続集の如き閑適を主としたもの」と言はれるのは正確には適當でない。雑律や後続集必ずしも閑適を主とするものではないから。——でも何れかと言へば寧ろ多く感傷として用ひられて居る事等によつて、結局源語の性格に風情・情趣——物のあはれ——を基調とする諷諭・感傷性のある事を主張して来たのである。それは既論稿を通して終始一貫して居るつもりである。とすれば

源氏物語の引用に諷諭詩が多いということは、その諷諭（又第二義的には感傷性情趣性も）性そのものに適合するような物語の世界が展開していたということになり云々（全上）

と言はれる氏の論は文句なしに私のそれと符合する訳である。——又秦中吟の引用についても氏は末摘花の重賦を説いて居られる。が私もこれとは別に夙く帚木卷雨夜品定と議婚との比較考察をして置いた。（熊本女子大学学術紀要第四卷第一号、「源語帚木卷と白詩議婚」）趣旨は全く同様である。——そしてその立証の一助として朗

詠や枕との比較を試みたのである。而も大事な事は其の場合でも基本的にはやはり引用詞句数の多少が大きく物を言ふ事となる訳である。

3、第3項では「宇治十帖に漢詩文引用が比較的少い」と言はれる事に少しく問題があるやうである。

なる程氏も引合ひに出された私の作成した巻別引用表（全上学術紀要第十卷第一号「源氏物語における漢詩文引用並に典拠に関する一二の問題」附表）を見ても、第一・二・三部の頂点をなす須磨・若菜下・宿木の各巻について、引用総詞句数須磨が15、若菜下が13であるのに対し、宿木は11と稍少い。総じて第一部よりは第二部、第二部よりは第三部と漸次下降の傾向を辿つて居るやうである。尤も各巻に平均すれば第一部33巻で95、一卷平均3、第二部8巻で37、一卷平均約5、対して第三部13巻で40、一卷平均3——宇治十帖10巻で35、一卷平均3.5——と機械的には決して少くない。が大勢はやはり下降にあると言つて良からう。

此の原因も或は今井氏の言はれる如く、其の性格表現が一層直接的写実的となつたためかも知れない。が常識的に言つてやはり日本人の書いた和文の物語であれば、漢詩文の引用が幾らか衰へて来るのもまた已むを得ない自然の成り行きではなからうか。それは兎も角何れにしても特に第三部乃至宇治十帖で漢詩文の引用が目に見え

て滅じたとは思はれない。否今井氏も宇治十帖に於ける漢詩文引用の多くは本文と渾然一体となつて秀抜であると言はれる通り、文集新樂府李夫人の引用なども専ら宇治十帖に集中して居り、引詩李夫人と相照応して其の性格・内容を写すに効果を収めて居る。かく漢詩文引用からも宇治十帖や第三部もやはり第一・二部に劣らぬ重要性を持して居る。

三、

最後に漢詩文引用に於ける改作の問題、或はその引用が果して特定の詩文のみを念頭に置いてなされて居るかどうか、といふ問題を取り上げたい。これは典拠出典の問題、延いては性格の問題とも絡んで重要な項目である。

先づ改作の有無について、これは全く今井氏の述べて居られる通りであらう。引用者の都合によつて其の作品の場や世界或は性格・内容に適合するやう作りかへられる事もあらうし、勿論原典そのまゝに作りかへられない場合も多いであらう。和漢朗詠集について挙げられた氏の正確詳細な論証によつてもそれは間違ひない。

尚源語の場合でも「霜華重」と「霜の花白し」の外、これと似たものは、例の「香炉峯」詩五首の一の「石階桂柱竹編牆」が用ひられた

竹編める垣しわたして石の階松の柱おろそかなるものから珍らかにをかし(須磨)

の記事がある。例の源氏謫居の様を叙した所である。

「霜の花白し」は勿論改作も考へられはする。が異伝「旧枕故衾」との關係上、或は又當時の文集別に「霜華白」とあり、源語はそれを原拠としたのかも知れない。対して此の方は現存文集すべて「桂柱」であり「松柱」とはなつて居ない。勿論「旧枕故衾」の例もある通り、當時の文集に「松柱」がなかつたとは必ずしも断ぜられない。が源語此の段の場から考へて或は故ら意識して「桂」が「松」に改められたやうな氣もする。何れにしても其時の都合によつて改作があり得た事は十分考へられる。

而して問題は次の特定の詩文か否か、つまり直接性と間接性といふ所にあるやうである。

けだし同一或は類似の漢詩文詞句が引用された場合、そこには当然それが果して原典直接の引用であるか、或は間接に他を介しての引用であるか、それとも其の兩者を併せたものか、或は又全然異つた他の出典からの引用であるか等の問題が生ずる。そしてこれにも右種々の場合があり得る。且つそれが其の何れと決定或は推定出来る場合もあらうし、遂に出来ない場合も勿論ある。私も嘗て論じた通りである。(全上)

然らば今井氏の場合は如何であるか。先づ故事套語の問題であるが、これは又詞想乃至詞句の翻案として用ひられた場合と、純然たる詞句そのまゝを用ひた場合との二様の

ある事を注意しなければならない。

例へば

みし人の雨となりにし雲井さへいとど時雨にかきくらす
ころ(葵)

の高唐賦の如き、立派に一首の歌想として翻案して用ひられた例である。そしてこれは

乍臥巫峽以空望烟霞(遊於松浦河序)

と既に萬葉にも同様構想の一部として翻案して用ひられて居る。或は文華秀麗集にも類似の作がある等、氏の言はれる通り高唐賦「雲雨」の語は当時貴族文人の常識套語となつて居た事も考へられる。而も源語此の場合それは詞句としてでなく歌想として採用されて居る。従つてこれはさういふ当時の常識套語を用ひたまでであり、別に高唐賦直接の引用ではないかも知れない。

同様な例が陶淵明歸去來辭の「三つの道」、述異記の「斧の柄」、史記の「塚の上」等であらう。

爛柯の故事は同一詞句で源語既に三回の引用がある。これは一寸珍しい例である。或は既に言ひふるされた周知の事であつたかも知れない。「塚の上」の季札の話も朗詠・文華秀麗集・田氏家集等にも歌はれて居り、必ずしも史記直接に仰ぐ必要はなかつたかとも思はれる。

或は「三つの道」の陶淵明も古来よく親しまれ、萬葉既に桃花源記「桃源」の引用があり(巻十七、大伴池主、七言

晚春遊覽一首并序「桃源通海」)これも既に一般化して居たかも知れない。それに菅家文章「三徑貧居任草蕪」の詞句も、道真関係の詩句も源語中他にも二三採られて居る事でもあり、或はこれも一つのヒントになつたかも知れない。

同様「三つの友」も第一義にはやはりどうも文集「北窓三友」を引くとの感を強くはする。が菅家後草の詩句もある事なれば、或は又其等をも参照せられたのかも知れない。

次に「繫がぬ舟の浮きたる例」、これについても既に述べた事がある。(全上)これまた一の詞想・翻案である。それに当る詞句に文選賈誼の鵬鳥賦があり、文集偶吟詩があり、更に菅家文章がある訳である。三詩何れも其の意を言ひ表はし、典拠としての資格を具へて居る。時代から言へば鵬鳥賦が最初であり、次いで偶吟詩、そして最後が菅家文章である。

今井氏は

道真の句もまた鵲鳥賦を模したものかも知れないが、源氏物語のそれもはたして鵲鳥賦と菅家文章とのどちらにより多く拠つているかを決定する事は困難ではあるまいか。(全上)

と言つて居られる。鵲鳥賦もさる事ながら、道真には白詩に学んだ形跡もある。例へば彼また楽天と同じく遷謫の身

となつたが、そこで同じ境地を詠んだ同題「不出門」の詩がある。且つ其の詩には「都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲」の句がある。此の句が直接樂天の「香炉峯」詩「遺愛寺鐘欹枕聽、香炉峯雪撥簾看」に拠つたか、それとも此の套語常識の応用であるかは尚問題であらう。が右兩者同題の詩がある事、且つ其の境地また全く相通する事等から見て、寧ろ文集直接の模倣ではないかと思ふ。とすると道真此の場合も亦寧ろ其の偶吟詩に拠つたと言へない事もない。又源語に於ける文集と文選乃至菅家文章との關係、つまり源語引用の漢詩文詞句は文選が案外少く、對して文集は圧倒的に多い。一方道真關係詞句も幾つか引かれては居る。が到底文集の比ではない事等から、源語のそれもまた案外偶吟詩であつたといふ予想が許されなくてもない。且つ又これは一方では前記高唐賦の「雲雨」等と違つて詞句的な要素が強い。けれども詞句としても「斧の柄」や「塚の上」等程故事性、従つて其の意味に於ける踏襲性・模倣性はなかつたとも思はれる。

結局源語引用本詞句の典拠が偶吟詩であつたか鷗鳥賦であつたか、菅家文章であつたか、それとも套語であつたか將た又其等幾つかを含めたものであつたかを決定する事は今の所氏の言はれる通り困難といふ外はあるまい。

以上は深淺濃淡の差こそあれ、皆詞想乃至詞句の翻案とて用ひらうしこ列である。詞想・翻案どころと言つてそれ

がすべて原典直接の引用でなかつたり、或は或特定の詩文作品の引用でないといふ事には勿論ならない。が同時に原典直接や或特定の詩文でない場合も十分あり得る。殊にそれが古來言ひふるされ一般常識化された故事・套語である場合には尚更其の可能性は大きい。

所がこれが右の如き全体的翻案ならぬ、原典詞句殆どそのまゝの引用、乃至其の要素を具へた引用の場合には、或はそれによつて出典の決定も可能である。試みに今井氏の引かれたのに例を取ると、朗詠の「霜の後の夢」(須磨)は嘗て私も論じた(全上) 如く、同集大江朝綱「王昭君」の詩句「胡角一聲霜後夢」そのまゝの引用でありかたぐい同詩第三・四句「辺風吹断愁心緒、隴水流添夜淚行」が物のみ悲しうて、水の音に流れ添ふ心地し給ふ(総角)

とこられた原詩そのまゝの詞句で引用されて居る。但し「黄金求むる絵師」(宿木)は右朝綱の詩にはなく、「昔胡に遺はしけむ女」(須磨)も必ずしも朗詠のみから導き得られるものではない。此等はやはり何か西京雜記あたり中国直接の典拠の存在を思はしめるものである。更には又王昭君の故事は其の事件の性質からも広く我国人の間に喧伝されたに違ひない。今井氏の言はれる通り文華秀麗集・凌雲集・経国集・和漢朗詠集・新撰朗詠・扶桑集等数多くの集に数多くの人によつて枚挙に勝へない程の作がある。こも尠らず右の事青、又文面詞句表現の上から、「霜の後

の夢」が明らかに朗詠直接の引用で、出典が朗詠といふ特定の事である事は一点疑問の余地がないであらう。

所で右は和漢朗詠集の例であつた。がこれが白氏文集になると、尚更其の傾向を強くするやうに思はれる。例へば、静かに思ひて歎くに堪へたり。とうち誦し給ふ、五十八を十取り捨てたる御齡なれど云々（柏木）

とあるのは明らかに文集自嘲詩の引用である。「静かに思ひて歎くに堪へたり」は同詩「静思堪喜亦堪嗟」の「堪喜亦」の三字を省いたそのまゝの引用であり、「五十八を十取り捨てたる云々」は「五十八翁方有後」から取り、更に「慎勿頑愚似汝爺」が柏木卷同所「汝が父にとも諫めまほしう思しけむかし」と響かせてある。原詩幾つかの要素を取つて可成り手のこんだ引用がしてある。いかに田氏家集に「吟白舍人詩」云々があるにせよ、右の如き嚴然たる詞句引用の蹤跡がある以上、一にこれは文集に基くといふものである。

略同様な理由によつて私は「冠を掛け車を惜しまず捨てし身」（若菜下）も、寧ろ此の典拠は先述例の文集諷諭詩秦中吟十首の一、不致仕に求むべきであると思ふ。（東京教育大学漢文学会報第十五号、「源氏物語に於ける引用漢詩文の典拠に関する一試論」参照）
けだし

1、若菜下同所には此の外尚「年深き身の冠を掛けむ何か惜しからむ」といふ一文もある。そしてこゝで注意すべきは其の何れもに「惜しまず」「何か惜しからむ」といふ「愛惜」を示す語が附されて居る事である。翻つてこれを該不致仕について見るに、恰もこれに応ずる如く「掛冠願翠綏」「懸車惜朱輪」と「願」「惜」の語がある。勿論こゝは「願」も「惜」も同意で、何れも「惜しむ」といふ要素が介在する。たゞ不致仕は年老いて尚何時までも官途に恋々たるを諷し、対して源語は恋々たらざるを言ふ。兩者肯否の立場を異にするだけで、つまり源語は裏から逆に不致仕を応用した訳である。

2、これを文集以外の漢籍にすると、後漢書は「掛冠」だけ、漢書や古文孝経や白虎通、或は今井氏の挙げられた田氏家集や水石亭詩卷は「懸車」だけに限られる。両書個々に併せ取つたといへばそれまでではある。が恰も後述「欹枕」と「撥簾」両用の総角卷の如く、これは先づどうしても「掛冠」「懸車」を同時同所に併用した不致仕に譲らざるを得ないであらう。

3、明らかに不致仕詩句の引用と思はれるものが他の巻にもある。即ち「朝の露に異らぬ世を何を貪る。」（夕顔）は不致仕「朝露貪名利」の援用である。「朝の露」はそのまゝ共通し、「何を貪る」は次の「貪名利」を言ひ掛け

たものである。尤も此の場合「朝の露」の如き、今井氏の論法に従へば或は套語・常識語の応用に過ぎないと言はれるかも知れない。が「朝の露に異らぬ世を何を食ふ」といふ措辞表現の上からも、又次にも述べる不致仕一聯の引用がある事から見ても、少くも此の場合源語に限つてはやはり不致仕によるものと思ふ。とすればこれまた恰も前条「惜しむ」を肯否裏を返して用ひたのと似た行き方である。更に又

齡などこれより増る人腰。たへぬまで屈まり。歩く例昔も今も待るめれど(行幸)

の記事は、これまた明らかに不致仕の「金章腰。不勝。偏。僂入君門」を承けて居る。「腰たへぬ」はそのまゝ同句であり、「屈まり歩く」は「偏僂云々」の翻譯である。而もこれまた不致仕の二句が合して行幸卷同所同時に用ひられて居る訳である。

以上三つの理由によつて私は若菜下「冠を掛け」「車を捨て」右二ヶ所の典故は文集諷諭詩の不致仕にあると思ふものである。

今井氏はこれについて

はたしてこのような類の熟語までも一一中国の原典まで遡るのが作者の意識を辿るのに忠実な所以であろうか。

(全上)

と言はれる。「冠を掛け」や「車を捨て」も「斧の柄」や

「塚の上」の如く確かに故事・套語の一つたるに相違ない。されば若し此の場合右白氏文集の不致仕がなかつたならば或ば先の例と同様、田氏家集や水石亭詩卷等に目を向け、言ひならされた常識・套語として片付ける事も出来たかも知れない。がしかし右不致仕のある以上、それは到底許されないであらう。果して若し然りとせば、少くも源語の場合、此のやうな熟語もまた白氏文集といふ中国の原典まで遡る事が必要であり、そしてそれは原典が文集諷諭詩であるだけに、尚更作者の意識を辿るのに忠実な所以ともなる訳である。

最後にもう一つ、例の「枕を敬て」の一件がある。これについても既稿既に論ずる所があつた。(全上)

先づ「簾垂捲上げ」と「枕を敬て」の両句同時に相対して用ひられた総角卷の引用が文集雜律「香炉峯」詩直接の引用であらう事は今井氏も認めて居られるやうである。けれども一方の須磨卷についてはこれに異議を挟み、此の語の套語性を重視すべきだとして居られる。

なる程文華秀麗集・経国集・菅家後草・扶桑集等今井氏の挙げられる幾つかの事例が示す如く、「敬枕」の語が既に当時の套語となつて居たであらう事は容易に想像される。それ等套語の応用に関する氏の論は正しく其の通りである。がしかし私は其の前に須磨卷此の引用が「敬枕」だけでなく「撥簾」との同時併用である事に注意したい。な

る程

月出でにけりな……とて御簾捲上げて端の方に誘ひ云々
枕を敬てて四方の嵐を聞き給ふは云々(須磨)

と

十二月の月夜の曇りなくさし出でたるを簾垂捲上げて見
給へば、向ひの寺の鐘の聲、枕を敬てて今日も暮れぬと
かすかなるを聞きて(総角)

との兩者を比べると、須磨巻は確かに総角巻程密接に直結
しては居ない。且つ「月」は同じでも須磨巻では「見」がな
い。又総角巻は「聞」の対象が白詩通り「鐘」である。が
須磨巻ではこれが「嵐」となつて居る等、兩者の間そこ
は可成りの径庭がある。今井氏はこれを「枕を敬てるだけ
の須磨巻」と言つて了はれる。がやはりこれも一種の両句
併用と言へるのではなからうか。

寧ろ私はそれよりこれが朗詠——若し朗詠の成立が源語
より後ならば原朗詠ともいふべきもの——の引用ではない
かといふ事が問題ではなからうかと思ふ。何となれば氏の
挙げられた文華秀麗集以下は皆「敬枕」の一句だけである。
が朗詠には其の両句が同時に採られて居るからである。

而して此の問題に対しては

1、「香炉峯」詩連作五首の中、朗詠にない第一首——

「敬枕」「撥簾」は第四首——にある「石階桂柱竹編牆」
の句が前にも述べた如く「桂」が「松」となつただけで

そのまゝ用ひられて居る。

2、同じく須磨巻には例の有名な「三五夜中新月色、二千
里外故人心」(八月十五日夜禁中独直对月憶元九)の外
「三千里外遠行人」(冬至宿楊梅館)が採られて居る。前
者は勿論朗詠にもある。が後者は朗詠にはなく源語のみ
である。

3、須磨巻引用此の段前後の文章は前詩「八月十五日夜云
々」一首全体と詞句的にも内容的にも極めて密接表裏し
て居る。朗詠の「三五夜中新月色」「三千里外故人心」の
二句だけでは到底導き出されないものである。

4、源語に採られた此等四詩何れも皆文集雜律詩に属す
る。それが朗詠には僅かに二つしか採られて居ない。此
の事は取りも直さず源語の引用が朗詠を介せず、直接文
集の雜律詩を通覧して行はれた事を意味する。

5、果して本卷光源氏の離京に当り、すべて簡略に止めた
手廻り品の中に、特に文集と「琴一つ」だけは携行を忘
れなかつたと記されて居る。言ふまでもなく此の「琴一
つ」はやはり雜律の部に収めてある「廬山草堂記」の「漆
琴一」を取つたものである。而も態々「琴一つ」と其の数
までも合はせて居る事を思ふべきである。

右五つの理由によつて私は「敬枕」以下須磨巻此等詞句
の引用が朗詠からでなく、すべて直接文集からの引用であ
ると思ふ。況や文華秀麗集其の他の集からでなく、従つ

て又これに関する限り套語の応用でもなかつたと思ふのである。

かくて源語に於ける漢詩文引用にも套語の問題は十分考へなければならぬ。私は決してこれを否定するものではない。が一方はつきり套語でないと断じ得る例も尠くない。殊にこれが白氏文集の場合になると、案外多くの詞句が文集直接の引用である事が分る。寧ろ何れかと言へば文集より文集以外による詞句出典の方が、套語となる可能性は遙かに大きいと言はなければならぬ。

けだし源語の引用を見ると、其の前後尚直接文集を出典とするのでなければ、套語だけではどうしても満足し解決し切れない要素を多分に有する。或は又源語には、当時文集が如何に愛読流行したとはいへ、一般の套語となるには尚距離があると思はれる詞句までも、篇中屢々引用されて居る。よつて以て套語若干の例外を認めるとしても、前記文集の優位性は絶対に揺がないと言へるであらう。そしてそれは源語の性格や其他を云為するに決して無視したり軽視したりする事は出来ないと思ふのである。

以上之を要するに源語と漢詩文との關係で

1、先づ出典詞句の検索・集計必ずしも無意味不必要なものではない。内的受容・主体性の問題と共に、平行・側面的に併せ行はるべき作業の一つである。

に白氏文集の引用はやはり相当に重要な意味を有して居る。

3、最後に漢詩文引用の直接性と間接性或は特定性については、故事・套語の可能性があるにも拘らず、意外に文集直接の引用が多い。

事を述べたつもりである。そして其の何れもが結局源語に於ける漢詩文の引用は、内外質量共に文集が圧倒的優位を占める事を示して居る。従つてそれに基づく文集との比較研究によつては、直接間接源語創作の態度なり性格の問題をも考定する事が出来ると思ふ次第である。

